

序文／国連事務総長

人類は自然との闘いを繰り返していますが、これは愚かで自滅的な行為です。私たちの無謀さが招いた結果は、人類の苦しみ、膨大な経済的損失、そして地球上の生物の加速的な崩壊に、すでにはっきりと表れています。

この闘いを終わらせることは、苦勞して得た開発の利益を放棄することではありません。また、よりよい生活水準を享受したいという貧しい国や人々の当然の願いを打ち消すものでもありません。それどころか、自然と仲直りし、その健康を守り、自然が与えてくれる非常に重要な、しかし過小評価されている利益を活かすことこそ、私たちみんなにとって、豊かで持続可能な未来をひらく鍵なのです。

人類と自然の関係を緊急に変える必要があるにもかかわらず、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックによる大きな苦しみの中では、それが見過ごされる恐れがあります。私たちの最優先事項は、大切な生命と暮らしを守ることです。しかし、パンデミックもまた、人類の脆弱さをあばくことで、2021年をより持続可能で包括的な世界へのターニングポイントとするのに役立つとされるかもしれません。

この報告書は希望の礎となるものです。気候の緊急事態、生物多様性の危機、毎年何百万人もの人々を死に追いやっている汚染、これらの影響と脅威を示す最新の科学的証拠を一つにまとめ、私たちが自然に闘いを挑んできたために地球が破壊されていることを明らかにしています。しかし同時に、和平案と、闘い後の再建プログラムを示し、私たちをより安全な場所へと導くものもあります。自然への見方を変えれば、その真の価値を認識できます。この価値を政策や計画、あるいは経済システムに反映すれば、自然を回復させ、その見返りを受けられる活動へと、投資を振り向けることができます。自然をなくてはならない味方と考えれば、私たちは持続可能性のために人類の創意工夫を凝らし、地球と共に、私たち自身の健康と幸福を確実に手にすることができるのです。

自然との仲直りは、今後数十年を決定付ける課題です。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの危機を機会ととらえ、変化を加速させていかなければなりません。今年、気候変動、生物多様性、砂漠化などをテーマにいくつかの主要な国際会議が開催されますが、これらは、よりよい回復と気候変動への取り組みに対する熱意を高め、行動を促す機会となるでしょう。私たちの最も重要な目的は、カーボンニュートラルのための世界連合を構築することです。2050年までに排出量をネットゼロにするという運動が、世界のすべての国、すべての都市、すべての金融機関や企業に取り入れられれば、気候変動の最悪の結果を回避することはまだ可能です。



食料の生産方法、水や土地や海洋の管理方法など、他のシステムを変えるためにも、同様の緊急性と熱意が必要です。開発途上国は、環境の悪化を止めるために、さらに多くの援助を必要としています。それらの必要が満たされて初めて、2030年までに持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための軌道に戻ることができるのです。

私たちには、世界に与える影響を別の方向へ変えていく力があることを、この報告書は示しています。再生可能エネルギーと自然を基盤とした解決策による持続可能な経済は、新しい雇用を生み、クリーンなインフラや回復力のある未来を創り出すでしょう。自然と仲直りした包括的な世界では、人々はよりよい健康と完全な人権を享受し、健康な地球に人としての尊厳を持って生きることができるようになるのです。

アントニオ・グテーレス
António Guterres
国連事務総長
2021年2月

序文／国連環境計画(UNEP)事務局長

新型コロナウイルス感染症のパンデミック発生前に幕を開けた2020年は、地球とそこに住む人々の持続可能性に向けた歩を進める、正念場の1年でした。社会の気運が高まり、いくつもの国際会議が開催され、人類が直面している3つの地球規模の危機、すなわち気候の危機、自然の危機、汚染の危機に対して大胆な行動を取ることが協議されました。これらの危機は、何十年間も絶え間なく続いてきた持続不可能な消費と生産によって引き起こされたもので、今では深刻な不平等をさらに増幅し、私たちみんなの未来を脅かしています。

この報告書は、私たちが、地球を保護し回復させることを緊急に決断しなければならない理由とその方法を非常に力強く科学的に論証しています。地球環境評価を独自の方法で包括的に統合し、それをもとに、資源の過剰消費と廃棄物の過剰生産がもたらす、自滅的で危険な結果を詳しく説明しています。

私たちが地球に極端な圧力をかけていることを、科学ははっきり示しています。UNEPの「排出ギャップ報告書2020」によると、パンデミックによって温室効果ガスの排出量は一時的に減少しましたが、このままだと今世紀の気温上昇は3℃以上になるとのことです。生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学—政策プラットフォーム（IPBES）のメンバーは、自然の急速な衰退について、またそれがアジェンダ2030と持続可能な開発目標（SDGs）にとって何を意味するのかについて、警鐘を鳴らしています。

生物多様性の喪失や生態系の完全性の喪失に、気候変動や汚染が加わると、評価対象となるSDGターゲットに対する私たちの努力が8割ほど損なわれ、今後、貧困の削減、飢餓、保健、水、都市、気候に関する進捗状況を報告するのがいっそう難しくなります。新型コロナウイルス感染症、すなわち動物から人類に伝染する動物由来感染症（人獣共通感染症）によって引き起こされた世界的なパンデミックにあらためて目を向けるまでもなく、きめ細かく調整された自然界のシステムが破壊されているのは明らかです。そして最後に、経済成長の「有害な足跡」、すなわち汚染と廃棄物は、毎年、世界中で何百万人もの人々に短命をもたらしています。

政府の予算や政治活動が、新型コロナウイルス感染症による医学的緊急事態への対応に取られてしまうのは当然ですが、最終的には、このパンデミックへの対応を、地球の緊急事態への対処に必要な経済や社会の変革の加速に結びつける必要があります。国連事務総長が「State of Planet（地球の現状）」のスピーチで述べられたように、「新型コロナウイルス感染症からの回復と私たちの地球の修復は、同じコインの表裏でなければならない」のです。



この報告書は、地球の「修復」に何が必要なのか、すべての人々の生活と幸福を守るために、人類の創意工夫と協力を十分に発揮できる変革的行動とは何かについて概説しています。修復とは、環境、社会、開発上の課題がどのように相互に関連しているかを認識した解決策のことです。修復とは、私たちの価値観や世界観、そして金融システムや経済システムも変えることです。修復とは、社会全体で取り組むことです。そして、修復とは公平で公正であることです。

UNEPの中期戦略（2022年～2025年）は、科学を指針として、強力な環境ガバナンスと経済政策を支えに、科学、政策、意思決定の結びつきをこれまでになく強化しようとしています。このような経済政策が土台となって、気候変動、生物多様性の喪失、汚染という問題の解決の糸口が見えてくる可能性もあります。そのようにすることで、私たちは加盟国を支援し、パートナー、科学者、市民社会、企業と協力して、この相互に結びついた3つの危機に取り組み、気候を安定させ、自然との調和のうちに生活し、汚染のない地球を守っていくことができるのです。

パンデミックは、人類の悲劇としてだけではなく、人々が個人や社会の優先事項を考え直し、現在と未来の世代の健康と幸福を守ることは、すなわち地球の健康を守ることだということを心に刻んだ節目として、記憶にとどめる必要があります。2021年は、私たちがその記憶の番人としての責任を引き受けた年として、覚えておかなければなりません。

インガー・アンダーセン
Inger Andersen
国連環境計画事務局長
2021年2月

まえがき

この報告書は、持続可能な開発目標（SDGs）の枠組みの中で、気候変動、生物多様性の喪失、汚染に同時に取り組む方法についての科学に基づく構想を示しています。内容は地球環境評価の科学的証拠をもとにした統合報告書です。今日の環境問題に取り組むうえで、インガー・アンダーセン国連環境計画（UNEP）事務局長の任命した著名な専門家やアドバイザーの方々は、科学と政策の対話において多大な貢献をされ、深い理解を示してこられました。この方々によって作成され、査読を受けた報告書の監修を任されたことを光栄に思います。

専門家の分析は、最新の様々な政府間地球環境評価をはじめ、多国間環境協定や国連機関、その他の支援を受けて作成された環境評価の主要な調査結果を統合した文書をもとに行われています（付属文書I参照）。この報告書ではそれらの環境評価を参照していますが、引用されている元の文献は参照していません。環境評価の結果は、本書の執筆者の責任で掲載しています。また、完全な最新の知識基盤の全容を示すために、限られた場合にのみ、査読済みで影響力の大きい文献や灰色文献についても追加的に評価し、言及しています。

このように統合した結果を、主要なメッセージとエグゼクティブ・サマリーの形で意思決定者に提示しています。前者は、明確でわかりやすく、事実に基づいたメッセージで、後者は、本文で詳しく立証し、参考文献も掲載した内容の要約です。第I部では、評価の結果がどのように互いに関連し合い、地球の未曾有の緊急事態につながったかを示しています。基本の環境評価はほとんどが政策立案に必要な情報ばかりですが、第II部では一歩進んで、人類と自然の関係を変えるために、蓄積された科学的証拠を社会の様々な当事者たちの手で具体的で広範囲な行動に、変換するにはどうすればいいかを提案しています。

この報告書は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという難局の中で作成されました。そのため、執筆者と科学諮問グループと事務局は、直接会わずに作業しなければなりません。作業はすべて何十回ものオンライン会議を通じて行われました。

この統合文書を完成できたのは、ひとえに、この報告書の科学的証拠の基盤として用いた国際評価を作成された方々の努力と、これらの評価に対する専門家のご協力の賜物です。また、この報告書の執筆に参加して下さった専門家グループの素晴らしい貢献と、報告書を繰り返し査読して下さった科学諮問グループの貴重なアドバイスにも、心から感謝いたします。特に、お忙しい中、執筆者とアドバ



Ivar A. Baste



Robert T. Watson

イザーがこの作業に、常に変わらぬ熱意を持って取り組んでくださったことに感謝したいと思います。また、UNEP事務局、研究員、デザイナー、科学コミュニケーションズ編集者からの強力なサポート、特にインガー・アンダーセン氏による洞察に満ちたアドバイスとインスピレーション、そして事務局の中核チームのゆるぎない献身的なご努力に、心から感謝申し上げます。

イヴァル・A・ベイスト

Ivar A. Baste

筆頭報告者

2021年2月

ロバート・T・ワトソン

Robert T. Watson

筆頭報告者

2021年2月